

氏 名	高山 良子
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 86 号
学 位 記 番 号	看博第 34 号
学位授与年月日	令和元年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	がんサバイバーと家族員のパートナーシップ ー夫婦に焦点をあててー Partnership between Cancer Survivors and Family Members -Focus on the couple-
論 文 審 査 委 員	主査 教授 藤田 佐和 (高知県立大学) 副査 教授 内田 雅子 (高知県立大学) 教授 池添 志乃 (高知県立大学) 教授 森本 悦子 (高知県立大学)

論文内容の要旨

目的: がんサバイバーと家族員におけるパートナーシップとはどのようなものか、その構造とプロセスを明らかにし、新たながんサバイバーと家族員の理解や支援の示唆を得ることである。

方法: 本研究はシンボリック相互作用論を理論的基盤とした、質的記述研究である。研究参加者は、初回がん治療を終了した 65 歳以下のがんサバイバーと家族員のペアであり、データ収集期間は 2016 年 8 月から 2017 年 7 月であった。データ収集は、インタビューガイドを作成し半構成的面接法を用いて、がんサバイバーと家族員 2 名 1 組にジョイント・インタビューを行った。分析方法は、①シンボリック作用論における連携的な行為が形成される過程の視点を参考に分析ワークシートを作成、②逐語録からがんサバイバーと家族員が関わろうとしている社会的行為を特定し、その文脈を抜粋、③分析ワークシートに沿ってコードを生成、④他のデータとコードを統合、⑤カテゴリー化を行い分析した。倫理的配慮として、高知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果: 研究参加者は、がんサバイバーと家族員のペア 9 組 18 名であり、全員が夫婦であった。がんサバイバーと家族員のパートナーシップは、2 つの局面と 7 つのカテゴリーから成り立っていた。第 1 の局面は、{相互理解を深め対等な関係を再形成する} 局面で、【個人にしかわからない辛さをわかり合う】【気遣いすぎない】の 2 つのカテゴリーが含まれていた。第 2 の局面は、{がんと生きていくために協働する} 局面で、【迷っている時は背中を押す】【“大丈夫”という安心感で支え合う】【お互いに歩み寄りながら決める】【力を合わせて治療を乗り越える】【がんと付き合う力を醸成する】の 5 つのカテゴリーが含まれていた。がんサバイバーと家族員のパートナーシップ形成のプロセスは、{相互理解を深め対等な関係を

再形成する} 局面を基盤として {がんと生きていくために協働する} 局面に移行し成り立っていることが明らかとなった。さらに、この 2 つの局面は時間の経過と共に様々ながん体験を共有する中でフィードバックする関係にあった。

考察：気遣いすぎない対等な関係は、がんサバイバーと家族員のパートナーシップの中核であり、個人にしかわからない辛さがあることをお互いが理解していることが重要である。さらに、気遣いすぎない対等な関係の再形成は、がんサバイバーにとって、自立と意思が尊重された家族の一員としての対等な関係の回復を意味するものであると考えられた。がんサバイバーと家族員ががんと付き合う力を高めていくためには、がんという健康問題を共有し、お互いが現実に向き合えること、がんと上手に付き合っていくための雰囲気や力を分かち合っていくことが必要である。がんサバイバーと家族員のパートナーシップに基づいた看護援助として、個人にしかわからない辛さの相互理解の促進、気遣いすぎない対等な関係を再形成するための支援、家族でがんと生きていく力を高めることに対する支援の示唆を得ることができた。

審査結果の要旨

わが国ではがんサバイバーは増加し続け、Cancer Trajectory をがんサバイバーと共に歩む家族も増加し、がんサバイバーの家族へのケアが探究されている。しかし、現代社会において、病者を内包する家族は複雑化・多様化し、がんと共に生きるがんサバイバーと家族員の新たな家族像の探究や、がんサバイバーと家族の一体的な看護援助の開発が課題となっている。これらを背景に高山氏は、がん看護専門看護師としての臨床実践を通して本研究の課題・研究の問いを発展させていった。

本研究の独創的な点は、現代社会の家族像の変容を背景に Cancer Trajectory を共に生きるがんサバイバーと家族員のあり方として、パートナーシップに着眼し、新たな視座でがんサバイバーと家族員の理解や支援のあり方を探究したことである。高山氏は、文献検討、パートナーシップの概念分析を行い、概念定義を行い、そのうえでシンボリック相互作用論を理論的基盤として家族を捉え、研究の枠組みを作成している。本研究では、がんサバイバーと家族員の二者間のパートナーシップを明らかにするために、利点と課題を明確にしたうえでジョイント・インタビューに挑戦し、9 組（18 名）からデータ収集を行っている。ジョイント・インタビューで収集したデータをシンボリック相互作用論における連携的な行為が組み合わされていく過程の視点を活用し、二者間の相互作用が失われないような新たな分析方法を開発した。語りを丁寧に分析して二者間のパートナーシップの現象が説明できるように結果を導いたことは優れた点である。研究の成果としては、がんサバイバーと家族員のパートナーシップは【個人にしかわからない辛さをわかり合う】【気遣いすぎない】【迷っている時は背中を押す】【“大丈夫”という安心感で支え合う】【お互いに歩み寄りながら決める】【力を合わせて治療を乗り越える】【がんと付き合う力を醸成する】の要素で構成され、パートナーシップ形成のプロセスは、{相互理解を深め対等な関係を再形成する}

局面を基盤として{がんと生きていくために協働する}局面に移行し成り立っていることを見出したことである。がんサバイバーと家族員のパートナーシップの中核は【気遣いすぎない】であり、個人にしかわからない辛さがあることをお互いが理解していることが重要であること、また、お互いのバランスをとり【“大丈夫”という安心感で支え合う】ことが特徴であった。パートナーシップは、個人にしかわからない辛さがあることを前提に相互理解を深め、気遣いすぎない対等な関係を基盤とし、情緒的な支え合いや合意形成、相互協力などがんと共に生きていくための協働の過程を通してがんと向き合う力を醸成している状態であると概念定義を行い新たな知見をもたらしたと考える。審査の過程では、家族と家族員の捉え方等についての質疑応答がなされ、今後の研究の発展に向けての助言を得た。本研究は、がんサバイバーと家族員のパートナーシップについての知見を深化させ、臨床実践の場のがんと付き合う力を高めることを目指した新たな看護援助方法を示唆するとともに、今後のがんサバイバーの家族像と、がんサバイバーと家族を一体として理解する視点を提案し、教育や実践に活用する礎を築いたと評価できた。

以上のことから、本審査委員会は、博士論文審査基準に基づき提出論文を審査した結果、本研究は、研究テーマの着眼点、独創性、研究へ着実な取り組み、丁寧な分析過程、論理的な論証による考察、新規性、研究成果の有効性と実践への発展性、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士(看護学)の学位授与に値する研究成果であることを認めた。